

ナイチンゲールから受け継いだ看護理論の基礎

I. 看護するための知識：医学知識とははっきり区別されるものである

「日々の健康上の知識や看護の知識は、つまり病気にかからないような、あるいは病気から回復できるような状態にからだを整えるための知識は、もっと重視されてよい。こうした知識は**誰もが身につけておくべきもの**であって、それは病気の専門家のみが身につける医学知識とははっきり区別されるものである。」

II. 病気は結果であり回復過程である：生活過程を振り返ってみよう

「病気とは、毒されたり衰えたりする過程を癒そうとする自然の努力のあらわれであり、それは何週間も何カ月も、時には何年も以前から**気づかれずに**始まっていて…以前からの過程の…結果として現れたのが病気という現象なのである。」

III. 看護とは何か：その人がうまく生きていけるよう生活過程を整えること

「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また、食事内容を適切に選択し適切に与えること—こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えること、を意味すべきである。」

IV. 健康の法則 = 看護の法則：人間がどのようにつくられているかを学び、実践し、自分のものに！

「健康の法則、すなわち看護の法則が…病人のなかにも健康人のなかにも共通に働いているのである。」

V. 人間はどのような存在か：地球上の特定の地域で両親から生まれ、人間社会の法則性のなかで育まれたその人の心が個別な人間をつくる。'みんなちがってみんないい'

「われわれの**身体**と、神がそれを置かれた**この世界との関係**について神が定めた法則について、…神がわれわれの**心の容器**とされたこの身体を、その心の健康なあるいは不健康な容器に仕立てる法則については、ほとんど学ばれていない。」

VI. 看護師とは何か：

「教育の仕事はおそらく例外であろうが、この世の中に看護ほど無味乾燥どころかその正反対のもの、すなわち、**自分自身はけっして感じたことのない他人の感情のただなかへ自己を投入する能力**を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである。」

VII. よい看護師の実例：

「赤ん坊を世話している優秀で古風な産婦付き看護師をじっと見つめてみてほしい。彼女はその赤ん坊が「いう」ことのすべてを、そしてほかの誰にもわからないことを、自分だけは理解しているという確信を持っているばかりでなく、赤ん坊のほうもほかの誰かがいうことはわからなくても、自分のいうことはすべてわかってきている、とかたく信じている。」

VIII. 看護師に求められる資質 - 1：優れた観察能力と現象に含まれている意味を理解する能力

「患者の顔に現れるあらゆる変化、姿勢や態度のあらゆる変化、声の変化のすべてについて、その意味を理解《すべき》なのである…自分ほどよく理解している者はほかにはいないと確信が持てるようになるまで…探るべきなのである。間違いを犯すこともあろうが、《そうしている間に》…よい看護師に育っていく…」

IX. 看護師に求められる資質 - 2：看護を職業とする者には教育・訓練が必要である（使命感）

「何かに対して《使命》を感じるとは…何が《正しく》何が《最善》であるかという、あなた自身が持っている**高い理念**を達成させるために自分の仕事をするのであり、…指摘されるからするということではない…**職業人誰もが**持っていなければならない使命感で…看護師は、靴でも…大理石でもなく、人間を対象に仕事をしなければならない。」

X. 看護師に求められる資質 - 3：三重の関心を注ぐ

「看護師は、自分の仕事に三重の関心を持たなければならない。ひとつは、その事例に対する理性的な関心、そして、病人に対する（もっと強い）心のこもった関心、もうひとつは、病人の世話と治療についての技術的（実践的）な関心である。」

XI. 1893年の総括：

- i 新しいアートであり新しいサイエンスでもあるものが**最近 40 年の間に創造されてきた。**
- ii そしてそれとともに新しい専門職業と呼ばれるもの - われわれはコーディングと呼んでいるのであるが - が生まれてきた。
- iii これは、ほとんどこの世界と同じくらい古く、この世界と同じくらい大きく、われわれの生と死と同様に、差し迫った要求 - 病気についての要求に応えるためのサイエンスと病人を看護するアートである。
- iv 健康への要求に応えるサイエンスは創られてきたが、アートはまだ創りだされていない。これは家庭生活から発し生活の中でのみ教えられる実地に学ぶべきアートである。
(神が、母親のそばにいつも医師を付き添わせようとは意図されなかったために... ; 人間誰も生まれてこなければ《ならない》のだから...)
→ヒトは1年間の生理的早産児

v 道理からいっても事実からいっても正しいことよりも誤りの方が先に見えるものだから…①病気とは何か ②健康とは何か ③看護とは何か ④訓練とは何か ⑤修練とは何か ⑥実地指導 ⑦ナースが陥りやすい危険 ⑧協働することの利点 ⑨将来への希望、の順に述べる。

- ① 病気とは何か：病気は健康を妨げている条件を除去しようとする自然の働きである。それは癒そうとする自然の試みである。
- ② 健康とは何か：健康とは良い状態をさすだけでなく、われわれが持つ力を十分に活用できている状態をさす。
- ③ 看護とは何か：この二つの看護はいずれも自然が健康を回復させたり健康を維持したりする、つまり自然が病気や傷害を予防したり癒したりするのに最も望ましい条件に生命を置くことである。
- ④ 訓練とは何か：訓練とは、看護師に病人が生きるように援助する方法を教えることである。系統的で実地に即した科学的な訓練によって、生と死、健康と病気といった途方もなく大きな事実と直面して、正確に観察し、理解し、正確に知り、実施し、正確に報告するという自らの仕事を自覚するように教えることである。訓練を受けることによって医師の指示に理性的に従い、人々の健康のメカニズムがうまくまわるようにケアし、その効果を確認められるようになるであろう。
- ⑤ 修練とは何か：修練とは心の訓練の神髄である。看護師は自然の法則についての知識を得るにつれて秩序や方法やそれぞれのあるべき場所や各自の仕事がわかるようになるし、物や力や空間に無駄のないことも見えてくる。また、あわてることもないとわかって来るし、環境や自分自身に対しても根気強くなって来る。学び続けるにつれてますます鍛えられ、課せられた仕事を果たすこと自体に熱中するようになる。このようにして『祝福された骨折り仕事』を続けていくために必要な忍耐力と着実性が身につくのである。
- ⑥ 実地指導：病院内で学び、人々の家庭に入り、健康を維持するケアに関わる体験が必要。
- ⑦ ナースが陥りやすい危険
 - i 時流にのってしまふこと、その結果熱意を失ふこと
 - ii 給料目当てになること
 - iii 一つの職業と思ひ、天職とは考えないこと
 - iv 書物や講義で学べると思っていること
 - v 看護教育の場の必要条件を考えないこと
 - vi 型にはまって進歩のないこと
- ⑧ 協働することの利点
 - i 個体の健康は、地域社会の健康。協働のなかに成功あり。
 - ii シカゴ大博覧会は、人間が人間に負っていることの証明。
 - iii 最高の善を理解し、共感と支持のもと、協働者として努力しよう。

- ⑨ 将来への希望
- i いま、看護の入り口に立ったばかりである。
 - ii すべての幼児、すべての人たちが健康への最善の機会を与えられるような方法、すべての病人が回復への最善の機会を与えられるような方法が、**学習され実践されるように！**
 - iii 病院というものは、文明の発達における一つの間段階。すべての病人を受け入れる性質のものではない。すべての母親が健康を守るナースとなり、貧しい病人はすべて、自宅に地域看護師を迎えるその日が来るのを待とう。すべてのナースは、**the Highest の支配内のひとつの原子であってほしい**。漠としたナース集団内の 1 原子であってはならない。

XII. 教育とは

「人間の教育は、人間をつくりかえることを目的として与えられるべきある。すなわち人間に、自分の能力を働かせる可能性を持たせ、その能力によって、真理を求めてきた人類の成果のなかで、何が本当に真理であるかをつかむことができるように、そして、神の本質、人間の本質と未来の姿を理解し、その未来像を実際に追求していく方法を判断できるようにすることなのである。」

【出典】

I - IX : 看護覚え書 1860

X - XI : 病人の看護と健康を守る看護 1893

XII : 思索への示唆 1860

2013年 薄井坦子